

機関番号：17301

研究種目：若手研究（スタートアップ／研究活動スタート支援）

研究期間：2009～2010

課題番号：21820030

研究課題名（和文） 近世日本における将軍側近の総合的研究

研究課題名（英文）

A study of the Sokkin(shogunal intimates) in the Edo period.

研究代表者

福留 真紀（FUKUTOME MAKI）

長崎大学・教育学部・准教授

研究者番号：60549517

研究成果の概要（和文）：

徳川幕府の政治体制の中で、将軍側近とはどのような存在なのか、彼らの人間関係と、江戸時代を通しての変遷の観点から、分析した。江戸時代中期の前橋藩主酒井忠挙を例に、姻戚関係にあった将軍側近柳沢吉保との相互依存関係や、彼らを取り巻く大名や旗本らの人間関係を具体的に明らかにした。また、柳沢吉保をはじめとする将軍側近が、江戸時代全体の中でどのように位置づけられるのか、という観点から論じた。

研究成果の概要（英文）：

This study examines the Sokkin (shogunal intimates) in the Edo Bakufu regime from two points of view: their human relations and the change of their position in the Edo period. It focuses on Sakai Tadataka, the Hanshu (load) of Maebashi in the middle of the Edo period. He had a matrimonial relation to Yoshiyasu Yanagisawa, an influential Sokkin of Shogun. They were mutually dependent helping each other in many cases. They had various complicated relationship with other Daimyo (military lords) and Hatamoto (bannermen). By analyzing these relationships, this study demonstrates the position and role of the Sokkin in the Edo period.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	1,060,000	318,000	1,378,000
2010年度	970,000	291,000	1,261,000
総計	2,030,000	609,000	2,639,000

研究分野：日本近世政治史

科研費の分科・細目：人文学・日本史

キーワード：将軍側近、幕府官僚、徳川幕府、徳川将軍

## 1. 研究開始当初の背景

### (1) 日本近世政治史研究における徳川将軍側近研究の意義

これまでの日本近世政治史研究は、特に江戸中・後期において、制度・組織といった構造論的分析に終始しがちという問題点があった。つまり、分析の対象が、「幕府日記」や各種法令集など、徳川幕府の手により系統立てて整理、編纂されたものであることが多かったため、政策や制度の建前や結論の部分しか明らかに出来ず、本質に迫るには、課題を残していたのである。

そこで、政治の主体・基盤は「人」であることから、それぞれの事象に関する個人事情や、家族関係・姻戚関係といった人間関係に注目することにより、より深く政治史の本質に迫ることができると考えた。その意味から、将軍との人間関係を基盤とする将軍側近の研究は、有効な切り口である。その上、将軍の意思の伝達者である側近が、政治世界にどのように関わるか検討することで、その時々々の将軍のあり方の違いを読み取ることができると、将軍側近の分析は、幕府政治史の体系的理解につながっていくと考えられる。

### (2) 研究開始段階での到達点

以上のような考え方による、研究開始時点での成果が、福留真紀『徳川将軍側近の研究』（校倉書房、2006年）である。本書では、5代将軍徳川綱吉政権期を中心に8代吉宗までの期間、将軍側近が幕府の政治機構の中でどのような位置を占めるのか、明らかにし

ている。

5代綱吉・6代家宣・8代吉宗には、前将軍の嫡子ではない、という共通点があった。つまり、将軍になるべくしてではなく、外からの就任である。よって、彼らには、幕府の政治機構の中で、自らが政治的手腕を発揮するためには、特に側近が必要となるという事情があった。それが、5代綱吉から7代家継までは「側用人」、吉宗では「御側御用取次」である。なお家継については、家宣の嫡子であったものの5歳で就任し、8歳で死去することから、家宣の時期の体制が継続したと考えられる。分析の範囲を、幕府史料にとどまらず、大名家史料にまで広げることで、より多角的な検討をおこない、側近が活躍した当時の職務の実態を詳細に解明した。

その結果、当該期の将軍側近は、「側用人」「御側御用取次」という「役職」に任命されていたのではなく、将軍との人間的つながりから成り立っていた。彼らの権限は、「奥向」と「裏（＝根回しの政治構造）」に限られ、老中を筆頭とする官僚組織とは「裏」において共存したが、「表向」にその権限を発揮することはできなかったことを明らかにした。

## 2. 研究の目的

以上示した、これまでの研究から見出された官僚組織・将軍側近の双方が活躍する「裏（＝根回しの政治構造）」には、「人間関係」が色濃く反映しており、この本質の追究が欠かせない。また、これまでの研究で取り上げていない時期の側近の実態を明らかにすることが、幕府政治史の体系的理解には必要で

ある。

そこで本研究では、「大名・旗本の人間関係」、「江戸時代全体にみる将軍側近の変遷」という2つの視点から、徳川将軍側近を総合的に捉えることを目的とした。

### 3. 研究の方法

「大名・旗本の人間関係」、「江戸時代全体にみる将軍側近の変遷」とともに、全国各地での大名家史料、幕府関係史料の調査を行い、得られた成果を分析、総括した。その成果は、両年度ともに幕藩研究会（学習院大学）において、報告した。

#### (1) 平成21年度

##### 史料調査

###### ①大名家史料

###### ○姫路市立城郭研究室（兵庫県）

：姫路酒井家文書

酒井忠挙が当主である酒井雅楽頭家の史料。

###### ○若狭歴史民俗資料館（福井県）

：小浜酒井家の関係史料、常高寺文書

酒井雅楽頭家とその一門である小浜酒井家との関係を分析。

###### ○香川県立ミュージアム（香川県）

：高松松平家歴史資料

###### ②幕府史料

当時の幕府情勢を研究するために、幕府日記およびその関係史料の分析を行った。

###### ○島原市立図書館肥前島原松平文庫（長崎県）：「徳川幕府日記」

###### ○独立行政法人国立公文書館内閣文庫（東京都）：「江戸幕府日記」

###### ○江戸東京博物館（東京都）：「御役人系譜」

###### ○東京大学史料編纂所所蔵の幕府関係史料。

以上の史料調査の分析から、徳川幕府中期の前橋藩主であり、将軍側近柳沢吉保の姻戚にあたる酒井忠挙をめぐる大名・旗本の人間関係を検討した。

忠挙の幕府政治に関する「譜代」大名としての考え方や、老中や忠挙の家格に対する意識、政治の場における将軍側近の位置や大名に対して果たした役割、という幕府内部の状況だけでなく、前橋藩政までも視野に入れ、将軍側近や官僚組織との人間関係を、広い意味での酒井忠挙をめぐる人的ネットワークの中で位置付け、徳川幕府の政治構造を解明した。

#### (2) 平成22年度

##### 史料調査

###### ①幕府史料

前年度と同様に、当時の幕府情勢を分析するために、幕府日記の分析を行った。

###### ○島原市立図書館肥前島原松平文庫（長崎県）：「徳川幕府日記」

###### ○独立行政法人国立公文書館内閣文庫（東京都）：「江戸幕府日記」

###### ○明治大学博物館（東京都）：「江戸幕府日記」

###### ○東京大学史料編纂所所蔵の幕府関係史料

###### ②将軍側近の史料

###### ○柳沢文庫（奈良県）：藪田家文書、柳沢家関係史料

###### ○東京大学史料編纂所（東京都）：

「水野忠友日記」「水野忠成日記」

###### ③老中史料

###### ○首都大学東京図書館情報センター（東京都）：

「水野家文書」「老中借写日記」

初代家康から3代家光までと、9代家重以降の側近についての、史料調査を行った。

最終的に、他の時代の側近との比較を視野に入れ、江戸時代中期の将軍側近が、江戸時代全体を通してどのように位置付けられるか、幕府官僚組織との関係から明らかにし、政治権力・構造の総括を試みた。

#### 4. 研究成果

##### (1) 「大名・旗本の人間関係」

徳川幕府中期の前橋藩主である酒井忠挙が幕閣と取り交わした書状群を整理した「御老中方窺之留」（姫路市立城郭研究室所蔵）を中心とし、他の大名家史料および幕府史料の分析を進めた結果、以下のことが解明された。

忠挙は、4代将軍徳川家綱の大老酒井忠清の嫡男として誕生した。しかし、父が次の綱吉政権で事実上失脚したために忠挙も家格を下げることとなり、再び幕府中枢で活躍するためには、幕府に働きかけなければならない立場となった。その上、名門酒井家一門の長であることから、親族や交流のある大名・旗本に、幕府への取り次ぎルートとして頼られた。

この忠挙の人的ネットワークの中に、将軍側近柳沢吉保との婚姻関係があった。忠挙は柳沢吉保に、酒井家や交流のある大名・旗本の家格維持や再興の指南を受けるだけでなく、綱吉政権への提言を行うなど、吉保を通して幕府へ様々な働きかけをしている。一方、新興大名である柳沢家にとっては、名門譜代大名の酒井家と姻戚関係を結ぶことで、箔を付けることができた。

忠挙には、柳沢吉保ばかりでなく、老中をはじめとする幕府の要職者、公家、医者、大奥女中など、あらゆる人的ネットワークがあり、当該期の武士の社会を「人間関係」の観点から、具体的に解明することができた（研究報告（2）および図書）。

##### (2) 「江戸時代全体に見る将軍側近の変遷」

①江戸時代後期の側近については、広範にわたる史料調査を行い、その一部について研究報告を行った（研究報告（1））。これは、文政期の幕奉行の日記と老中の水野忠成の日記を分析しながら、江戸時代後期の幕府官僚の在り方を検討したものである。幕奉行とそれを取り巻く当時の幕府官僚の職務の実態や、幕府での在り方が具体的に明らかになった。

②江戸時代中期については、柳沢文庫（奈良県）の調査を行い、柳沢吉保の時代の柳沢家老藪田重守の家に伝わった藪田家文書をはじめとする柳沢家関係史料の分析を進めた。特に、「人間関係」に注目し、歴史学の視点だけでなく、文芸作品の中で、将軍側近がどのように描かれてきたか、という視点も取り入れることで、多角的に将軍側近を明らかにした。

以上の成果は、『将軍側近 柳沢吉保—いかにして悪名は作られたか』（新潮社）として発表をするべく、執筆を進めた。

柳沢吉保は、文芸の世界で描かれ、巷に伝承されてきた将軍を凌ぐほどの政治権力を持った悪役のイメージと異なり、意図せず持たされてしまった自らの権力に当惑しながらも、幕府の官僚システムを損なうことなく、分をわきまえ、控えめに、実直に生きようとした。しかし、それにもかかわらず、その死後も、悪評を甘んじて受け続けなければならなかったという宿命を負った人物であることが明らかになった。加えて、吉保だけでなく、牧野成貞・喜多見重政・南部直政・相馬昌胤など、徳川綱吉のほかの側近についても言及し、「役職」というより「人間関係」から成り立つ中期の「将軍側近」の特色を具体的に明らかにした。

また、将軍側近の変遷過程の中で、ほかの時期の側近とも比較し、吉保はどのような立場にあるかにも注目した。加えて、江戸時代全体を通しての将軍側近と幕府官僚組織の関係の分析も試みた。

なお、本書の研究は、平成23年度に継続し、本書自体の刊行は、平成23年5月20日となった。

ほかに、7代将軍家綱の時代にも注目した。将軍が自ら政治的手腕を発揮できない幼少な将軍の場合、老中を筆頭とする官僚組織と将軍側近は、どのように政治に携わるのか、両者の関係から具体的に明らかにした。

### (3) 今後の展望

「江戸時代全体に見る将軍側近の変遷」については、この度の研究では、江戸時代中期の側近を例に、彼らが、江戸時代全体の中でどのように位置づけられるのか、という観点から論じた。

この問題については、江戸時代後期の側近の具体的な分析を積み重ねることにより、より深化させることができる。

本研究で、後期の側近の広範な史料調査を進めることができたので、今後は、より具体的な事例分析を進めることを課題とし、研究を展開していきたい。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[学会発表] (計2件)

### 研究報告

(1) 福留真紀「文政御幕奉行の日記―「柳営補任」の空白」

幕藩研究会、2011年2月19日、  
学習院大学

(2) 福留真紀「綱吉政権期の太皇太后中松枝―「御老中方窺之留」にみる御年寄の養子縁

組」

幕藩研究会、2009年12月26日、  
学習院大学

[図書] (計1件)

福留真紀『名門譜代大名・酒井忠挙の奮闘』  
角川学芸出版、2009年、214頁

## 6. 研究組織

(1) 研究代表者

福留 真紀 (FUKUTOME MAKI)

長崎大学・教育学部・准教授

研究者番号：60549517

(2) 研究分担者

( )

研究者番号：

(3) 連携研究者

( )

研究者番号：